

結婚も離婚もにくい社会

こうした雇用環境を背景に、結婚と離婚を見てみましょう(図2)。結婚したら子どもをもつべきという意識は男女ともに高いけれど、仕事と子育ての両立への不安は大きく、最近の若い女性は結婚して子どもを産んだ後に仕事を続けることができるとは考えていないようです。そのため年取の高い男性と結婚し、専業主婦になりたいという女性も多い。しかし、雇用が不安定な社会で、特に若い男性の年収はそれほど高くなく、妻と子どもを養っていくには足りないのが実状です。そのため、求めるものと現実にギャップがあり、未婚率の上昇の一因となっています。

一方、離婚に目を向けてみると、社会が不安定になってくると結婚生活に経済的安定を求めるようになり、その結果、離婚は避けるべきという考えも強くなるように思います。結婚して一人前とか、離婚なんて世間体が悪いとかよくいいますよね。結婚へのハードルが高く、いったん結婚すると、その結婚を維持しなければならぬという圧力も強いのが現実ではないでしょうか。

離婚は避けるべきという考えを背景にして、DVの被害認知件数も増加しています。私のところには

DV被害者が多く相談に見えますが、離婚を躊躇する方は多いです。理由を聞くと、「経済的な不安」と「子どものために別れられない」というのです。

特に女性は、離婚について経済的な不安が大きい。ひとり親家庭の相対的貧困率(厚労省国民生活基礎調査2010年)は50・8%となっていますので、確かに離婚したら経済的には厳しくなることは避けられません。しかし、子どもにとって「おまえがいたから離婚しなかった」と責任を負わされ、母親がDVを我慢して生きる姿を見るよりも、母親が笑って暮らしている姿を見るのが一番幸せなはず。子どもがかわいそうだから離婚できないというふうには考えてほしくないと思っています。

多様な価値観

親世代の常識は通用しない

結婚する時もありますが、離婚する時も親が干渉するとうたい話がかじれるように思います。親と子の世代間に結婚や家庭をめぐる意識の格差があります。雇用をめぐる社会が変化し、格差が広がっている中、生き方の選択も増えています。結婚をめぐる価値観が多様化してき



ている中で、親世代の常識は通用しないということをしっかりと意識して、見守りに徹することが重要です。結婚も離婚も、「お前が選んだものはお前が責任とれ」と自己責任論で語られることが多いですが、本当に自分で選んでいるか?ということを知りたいです。自己決定をすることが前提です。離婚する、しないということも、後悔しないためには情報収集能力と、冷静かつ客観的な分析力が必要です。そこで、結婚や離婚についての価値観を見直していただきたい。結婚の重圧からの解放と、離婚のハードルからの解放、当たり前からの脱却が必要です。

図2 結婚・家族に関する未婚男性・未婚女性の賛成意見割合

国立社会保障・人口問題研究所「第14回出生動向基本調査 結婚と出産に関する全国調査 独身者調査の結果概要調査」(2011年)
※対象は18~34歳の未婚者(参考にした妻は初婚同士の夫婦の35歳未満の妻を対象)

結婚・家族に関する考え方	未婚男性		未婚女性		妻(夫婦調査)	
	賛成	反対	賛成	反対	賛成	反対
① 生涯を独身で過ごすことは望ましい生き方でない。	64.0	31.9	57.1	39.4	57.9	38.7
② 男女が一緒に暮らすなら結婚すべきである。	73.5	22.8	67.4	29.4	68.5	28.5
③ 結婚前でも愛情があるなら性交渉してもいい。	84.0	11.9	83.2	13.0	89.2	7.7
④ どんな社会でも男らしさ・女らしさは必要だ。	86.1	10.4	85.0	11.8	88.2	9.1
⑤ 結婚後も家族や相手とは別の自分だけの目標を持つ。	81.2	14.9	84.2	11.9	84.9	12.2
⑥ 結婚後、家庭のために自分の個性を半分犠牲にする。	58.2	38.0	45.4	51.2	52.4	44.8
⑦ 結婚後は、夫は外で妻は家庭を守るべき。	36.0	60.1	31.9	64.7	30.9	66.2
⑧ 結婚したら子どもは持つべき。	77.3	18.7	70.1	26.3	67.8	28.6
⑨ 子どもが小さい時は、母親は仕事を持たずに家にいる。	73.3	22.9	75.4	21.5	66.2	30.7
⑩ 結婚後は性格の不一致ぐらいで離婚すべきでない。	72.3	23.8	62.2	34.1	58.2	38.5
⑪ 結婚してなくても子どもを持ってもいい。	31.6	64.7	33.7	62.9	39.1	57.9

若者のチャレンジを

推奨する教育の重要性

日頃相談を受けていて、若者世代の自己肯定感が非常に低いと感じます。これは教育において若者の決定が尊重されていないことと、経験不足によると考えています。まずやってみて失敗から学ぶことは多いのです。これを結婚についていえば、結婚前に恋愛の経験を積んでいることが、自由な結婚への条件だと私は考えています。「いっぺんふられて

から結婚しろ」ということです。ふられたことのない人は、結婚後に自分が配偶者から嫌われる状況を理解できないのです。「なんで自分がこんなにしてやっているのにお前は俺から離れていくんだ」って。こうした感覚がDV加害者にあります。しかし、結婚前に恋愛したり同棲したりという若者のチャレンジについて、大人世代がそれを推奨してあげないですね。特に「結婚するまでは性経験なんかいい方がいい」という価値観の人にもいます。そのた

め性教育はしない方がいい、性に関する情報を与えず「純潔」なまま結婚するのがよい、というような古い価値観はまだにあります。

よくも悪くも社会には性に関する情報があふれ、若者たちは経験を積んでいるのです。大切なのは、若者が雑多な情報から正しい情報を見分ける能力と、自分と相手を尊重した男女関係を営める能力を育むことです。まずは自由な選択を尊重する、そして、失敗したときには大人が総出で助けてあげる、それが

教育の役割ではないでしょうか。教育現場にいる方にはそのような視点をもつていただきたいし、それを支援する教育の仕組みを作ってもらいたいと思います。そのように教育が変われば、いずれは「結婚したい人が結婚でき、結婚したくない人はしなくてもよい社会」「離婚しても自由に暮らせる社会」「家庭の中で暴力がない社会」につながっていくと思います。

男女平等推進フォーラム講演会

2013(平成25)年9月29日開催

それってどつなの?!

はじめは小さなつばきから

講師 斎藤美奈子さん

(文芸評論家)



「女性のあるべき姿」というものを、社会がどれほど自然に、当たり前のこととして私たちに求めてきているのか。身近なニュースやwebサイト、文学作品から例を引きながらのわかりやすいお話でした。

最近の言葉「女子力」があるという女性像は、一歩引いて男性や目上をたて、自分はサポートに回ることを上手にアピールできることだったり、セクハラに遭うのは女性の側に隙があるからだとしていたり。男女平等とはとても言えない現状がそこに現れています。

男性と女性であらかじめ上下がある、ふるまい方のフォーマットを規定されている。そういう差別を当たり前として受け入れた上に成り立つ情報を、webなどでどんどん流している。それを見てまたふるまいを変える人も現れる。これは怖いことだなと感じました。

そういう、「変だな」と言う状況に置かれたり、情報にふれた時は、違和感を大事に、放っておかず、忘れず、表明していくことが大切。

表明というのは議論したり、論文にまとめたりと大掛かりなことではなく、自分の環境の中で、ちょっとした発言やふるまいを積み重ねること。そのためのスローガン、「あいうえお攻撃」を紹介され、締めくくりになりました。

あいうえお攻撃 「変だな?」と思ったら・・・

- あ あきれる(「変なことを言ったかな」と思ってもらえるように)
- い いかる(「私、怒っちゃいますよ」と言う)
- う うなる(「ふーん、そんなふう思っていたんですね」と)
- え え〜〜!!! (違和感を表明する)
- お オウムがえし(相手のいうことをそのまま返す)

(市村)